
魔法少女リリカルなのは 破壊と創造の転生者

K01EU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 破壊と創造の転生者

【Nコード】

N4152Z

【作者名】

K01EU

【あらすじ】

気がついたら俺は死んでいた。理由？わからない……。ここは何処だ？真っ白な空間だ。・

たしか俺は昨日PCでニコ動画をみてゲームして寝たはずなんだけど。・

???「よつやく気づきおったか」・・・え？

・・・ええええええ！？誰この人白いローブに髭がながいおっさん。・。どこぞのダンブ ドアですか？

え？もしかしてこの真っ白い空間に名前の所に？？？とか付くパターンってあれですか？2次創作系のあれですか？

この物語は、オリ主が転生してチートな能力を得て原作介入し原作を再構築する話です。

嫌いな方は回れ右をしてください

「ってかなんで俺がここに居るの？寝てたはずなんだけど」

「それなんじゃが・・・」

なんだ？暗い顔しているな・・・

「実は下級神が君の名簿を汚してしまつてなあ・・・本来は死ぬはずは無かつたのじゃ・・・」

「・・・その神様殴つてもいい？」

「もう地獄におくつたわい」

「そうか・・・俺は天国？地獄？」

「いや、本来は死ぬ予定ではないのじゃ、だから好きなのところに転生させてやるわい」

「え！？まじで？・・・じゃありリカルなのはの世界つて大丈夫？」

「ふむ・・・いいぞ、あと能力を3つほどやるわい好きなのを言ってくれ」

いきなり言われてもなあ・・・そうだ！伝勇伝でいこうあとFate・・・あれ？これかなりのチートじゃんwwwwww

「じゃあ・・・一つ目が外見は伝勇伝のライナ・リユートで、二つ

目がFateの投影魔術で・・・

三つ目が複写眼アルファステイグマを完全使いこなせるようにしてくれ」

「かなりのチートじゃのう・・・まあよい。それとデバイスをやろう、ほれっ名前はアルフィじゃ」

「何から何まで悪いな神様。」

「気にするでない、元々はこちらの失態じゃ・・・そろそろ行くよ、あの門をくぐればいいはずじゃ。家と金は用意しとくからな。それとA'sからにしろいたからの」

「おう！ありがとうな神様」

そして俺は門をくぐった・・・

そして何故か床に穴があいた。

「門の意味ねええええだろおおおおおおおおおおお
おおおおおおお!!!!」

設定

主人公：星道せいどう 翔かける

前世ではアニメが大好きな中学3年生

神様いわく天界のミスで起きた事故により死亡。

年齢：15歳 9歳

願い事

- 1、外見を伝勇伝のライナ
- 2、知っているアニメ・漫画の能力を使える
アルファステイグマ
- 3、複写眼（完全支配下）

好き：昼寝、

嫌い：外道、人を化け物扱いする奴

デバイス：アルヒイ

ブレスレット型のインテリジェントデバイス

主に結界、星道の補助

AIは実際落ちついて見えるが実はボケ

原作介入・・・え？崩壊しすぎ？きにしたら負けだと思っ（前書き）

作者「更新がおくれちゃいました・・・」

翔「なぜ？」

ゲームしてたなんて言えない・・・

翔「ほおほお・・・なるほどいい度胸だな」

作者「読唇術！？・・・ちょｗｗそれマジでやばいからｗｗｗｗ」

翔「求めるは焼原>>>・紅蓮！！」

作者「ぎゃあああああああああ！！！！！！」

原作介入 ……え？崩壊しすぎ？きにしたら負けだと思う

「んっ……ここは……」

そっだ……俺は前世で死んでこの世界に転生したんだっけ。

お金は問題なさそうだし、とりあえず最初は公園で能力確認かな。

公園についた。

え？はしよりすぎ？気にしたら負けです

「アルフィ、結界を張ってくれ、能力を確認したい。」

『了解』

直後に公園を覆うように丸い結界が張られた。

「とりあえず……我、契約分を捧げ大地に眠る悪意の精獣を宿す
！」

うおおおお！身体能力が一時的にあがったぞおお！やつほい！楽しい！

「次は次は！！・・・求めるは雷鳴>>>・稲光！！」

うおおおお！稲光キターー！！

「他には・・・トレース、オン投影開始」

うおおお！エクスカリバーキターアアア！！！！

そんな事してたら日が暮れて夜に・・・

「ふわああ・・・楽しかったなあ・・・帰るか・・・」

『マスター！結界が発動されました。』

「ありえ？なのはとかヴィータ達かな？とりあえず介入してみるかなあ・・・
とりあえず黒いローブを付

けてっ・・・と」

ヴァイタ side

「アイゼン！」

おっ、ヴァイタだ。……あれ？レイ八さんにカートリッジシステムが搭載されてる
ってことは、今回はヴァイタ達を撤退させるのが先決だな。

「てりやああああああ！！！」

『プロテクション』

「くっ……堅てえ……」

「すごい……」

『バリアブースト』

うはぁ……あれは堅そうだな。まあ……そろそろかな

「アクセルシューター……シュート！」

「なっ！？」

じゃあ助けますかね

「求めるは雷鳴>>>・稲光」

アクセルシューターと稲光がぶつかり爆発をおこした

「ふええ?!」

「誰だ!」

「守護騎士達、君達の見方です。そして名は・・・エミヤと名乗りましょう。」

思いつかなかったのでFateの衛宮君の名前にしました。
とりあえず守護騎士達に念話を・・・」

(聞こえるか?守護騎士達よ。援護する、撤退を)

(誰だデメエ!)

(そんな事いつてる場合か?それに烈火の将よ、決闘ならいつでもできるが)

仲間を失うわけにはいくまい・・・)

(分かった・・・撤退しよう・・・だが結界はどうする?)

(それはこちらで破壊する3・2・1で各自散らばれ。いいな?)

(今回だけだぞ・・・)

ヴィータは不服そうだな・・・まあ仕方ないか

「あなたは誰ですか？お話を聞かせてください！」

「悪いが話す事などない・・・(結界を破壊する3・2・1・・・
散らばれ!)
我・契約文を捧げ・宙
を覆う精霊の力を放つ!!」

シグナムside

「すまないテストロッサ・・・戦いはお預けだ」

「シグナム!!」

(結界を破壊する3・2・1・・・散らばれ!)

カウントが0になったと同時に私達は散らばった

技をはなつた瞬間結界が砕け散った

クロノside

「なんだ・・・今の魔法は・・・見たことがないぞ・・・エイミィ、追跡は？」

「ダメ！反応がロスト。多重転移の可能性が」

「至急、みなさんをアースラへ転送させます」

そう、リンディが地上で戦っていた魔道士達に告げた

翔side

「守護騎士達、全員無事か？」

「すまない、助かった。・・・だが貴様は何者だ？」

「そつだ！いきなりでけえ光の柱が落ちてきたあと結界が破壊された・・・」

ミッドでもベルカでもねえ魔法をつかいやがって！」

「先ほどは、エミヤと名乗っていたが本名は星道 翔だ。

魔法に付いてはレアスキルと思ってくれればいい」

「ふむ……謎がおおいな」

うおっ……ザッフィーいたんかい……

「今日はもう遅い……明日、そちらへお邪魔してもいいか？闇の書についても話とく」

「なっ！？お前、闇の書の事を知ってるのか？」

やはり食いついてきたか……まあ結局の目的はリインフォースを消させない為だし

「明日、話す……それにお前達も帰りが遅いと主を心配させるぞ？」

「それもそうだな……では、明日の夕方に来てくれ。主にも話とく」

「分かった。」

くおまけく

仮面の男A「本当はでる予定だったのに・・・」

仮面の男B「次から頑張ろう・・・父さまの為にも」

原作介入・・・え？崩壊しすぎ？きにしたら負けだと思っ（後書き）

仮面の男・・・空気でしたねえ・・・

まあ、ちゃんと出しますよ？けっ・・・けっして忘れてませんからね？！

転入早々の質問攻めは以外と辛い

翔side

『マスター起きてください。朝です。』

「んっ……あと5分……」

『起きてくださいマスター』

「zzzzzzzzzz」

『起きろって言ってやがります。ダメマスター』

「!？アルフィ……今なんて？ダメマスターって聞こえたのだが……」

『何を言っているのですか？マスター……寝ぼけてるので聞き間違えたのでは？』

「そうか……えと、今は朝の5時か……今日から学校かぁ」

そう……今日から翔は聖洋大付属小学校へ転入するのだ……きっかけは昨日の夜へと遡る

回想

『マスター、神からの通信です』

「え、神様が？ いったいなんだろう・・・ とりあえず繋いで」

『了解しました』

「どうかした？ 神様」

「ふむ・・・ お主、聖洋大付属小学校に転入しないか？」

「え？ いきなりなんで？」

「ふむ・・・ なんとなく」

「なんとなくかよ！ 一本とられたよ！」

『つまらないですマスター』

「・・・」

「・・・」

アルフィの冷たいツツコミに会話がなくなった翔と神様である

「まあ・・・ とりあえずあえずどうじゃ？ 直ぐにでも転入手続きができるぞ
いい」

「なのはやフェイト達がいるんだよな・・・まあいいか、分かったいつから?」

「明日から」

え?今こいつなんて言った?明日?急すぎじゃない?
もう一度聞いてみよう

「ごめん!聞こえなかった・・・いつから?」

「明日から」

「うおー!急すぎるだろ!筆記用具とかまだそろえてないわ!」

「安心せい、制服、ランドセルはこちらで用意してく。」

「はあ・・・しょうがない分かったよ」

「では、その言いつ事でさらばじゃああ」

回想終了

「まあ・・・とりあえず荷物はOK、制服の身だしなみもOK・・・
じゃあ行くかな・・・」

めんどくさそうに翔は家を出て歩いて学校へ向かった

職員室前

とりあえず職員室前まで来た・・・とりあえず中へはいつてみるか

コンコン・・・ガラガラア（扉があいた音）

「失礼します。本日より転入の星道 翔です。」

「ああ・・・君が転入生の・・・とりあえず今から教室いこうか。
先生が読んだら教室へ入ってね」

「分かりました」

教室

「はあい！みなさん席についてください！」

先生の合図で生徒は席に着いた

「なんと、今日はこの間のテストロッサさんに続き転入生がこのク

とフェイトは尋ねてきた。まあ普通の反応でいいかな・・・

「よろしく。あと翔で読んでくれ、苗字で呼ばれるのは慣れてないんだ」

「わかった、翔。私の事もフェイトって呼んで」

「ああ、改めてよろしくフェイト」

「!?!?!?!?!」

あれ？フェイトの顔が赤い・・・風邪でも引いてるのかな？

(マスターは鈍感・・・っとメモメモ・・・)

そんなこんなで昼休みになった・・・あれ？仲良し4人組が近づいてきた・・・

「翔、お昼一緒にどうかかな？なのは達もいるんだけど」

「いいのか？一緒に・・・迷惑とかじゃないか？」

前世では一時期、イジメられてた事もありすぐくびっくりした

「全然！！迷惑じゃないよ！あと私は高町なのは。よろしくね。翔くん」

「私はアリサ・バニングスよ。まっ・・・まあ宜しく／＼」

「私は月村すずか。よろしくね？翔くん」

やべえ・・・すげえうれしい・・・

前世でこんな事一度もなかったからか？

「じゃあ屋上でたべましょう！」

とアリサが言い出しみんなで屋上へいった

「翔のお弁当・・・凄くおいしそう・・・」

「ふえ・・・おいしそうなの・・・」

「凄いわね・・・」

「凄い・・・」

分かるでしょうが上からフェイト、なのは、アリサ、すずかの順

「お母さんが作ったの？」

とすずかが聞いてきた。・・・どうするかな・・・適当にごまかすか

「俺、一人暮らしだから、自分で作った」

「お父さんとお母さんは？」

となのはが続いて追い討ちをかける

「両親は事故で亡くなった」

「」「」「！？」」「」

「ふえ！・・・ごめんなさいなの・・・」

「いや気にしてないし・・・ほら時間が無くなるぞ早く食べよう」

「そっそっね！食べましよう！」

そして放課後

「翔くん、一緒に帰ろう」

なのはが誘ってきたが、この後は八神家へ行かなければならない・・・
・断るか」

「悪いなのは、この後に用事があるから一緒に帰れないや・・・明日一緒に帰ろう！」

「そうか・・・じゃあ明日ねー！ばいばい翔くん！」

「ああ・・・じゃあね」

そしてしばらく歩き八神家に着いた

転入早々の質問攻めは以外と辛い(後書き)

はぁ・・・疲れたぁぁ

闇の書の真実

「よし・・・行くか」

ピンポンと俺はインターホンを押した

「はい、どちら様ですか？」

「星道です」

『星道です（キリッ）』

（少しだまれ）

「星道さん・・・ああシグナムの言ったた！ほなどうぞ上がってください」

「お邪魔します」

「星道か・・・よく来たな」

はやてとシグナムが出迎えてくれた

（今日は私の知り合いでご飯をご馳走って形でごまかしたのだが・・・大丈夫か？）

（問題はない。なら本題は、はやてが寝てからにしよう・・・いいか？）

(わかった)

「いらっしゃい、星道さん」

「お前は・・・」

上からシャマル、ヴィータ・・・やはりヴィータは警戒してるな

「じゃあ早速ご飯の準備やな！」

「星道！もつと食べ。はやての料理はギガウマだぞ！」

さっきまで睨んでたはずのヴィータがはやての料理を勧める・・・
確かにうまいな・・・

「星道さんどうや？お味のほうわ」

「凄くおいしいです。ありがとうございます」

「おおきにな／＼／＼」

(マスターってばまた無意識にフラグ立てましたね)

そんなこんなで賑やかな夕食が終わり

(星道、一度帰る振りをしてくれないか?)

(ん?なんでだ?)

(主は収集の事をしらない)

(・・・分かった準備が出来次第呼んでくれ。)

(わかった)

「じゃあ・・・そろそろ帰ろうかな」

「あっ星道さん、今日はありがとうございました」

「それはこっちのセリフだ。それに歳は同じだろ?翔でいいよ」

「ほな、翔くんおおきにな」

「ああ・・・じゃあお邪魔しました」

「また来てくれ星道」

「ありがとう、じゃあな」

(シグナム、はやてが寝たら言ってくれそちらのリビングに転移する)

(わかった)

P M 2 2 : 3 0

(すまない待たせたな来てくれ)

(すぐに転移する)

そして俺は八神家のリビングに転移した

「みんな集まっているな・・・今から闇の書・・・いや夜天の書について話そう」

俺は知る事をすべて言った。収集してもバグがあり足は治らない。その事を話した

「私達の努力は無駄だったのか・・・」

「ふざけるな！そんな話が信じられるか!」

「そんな・・・」

やはり守護騎士達は驚いてる

「待て、話を最後まで聞け。はやての足の事に関してのために俺がいるんだ」

「どういうことだ？」

ザフィーラが疑問に思っている

「とりあえず収集し闇の書を覚醒させその時に防衛プログラムを消滅させる……だが……」

「だが？」

「管理局の協力が必要不可欠になる」

「なんだと!？」

「防衛プログラムのコアを破壊する前にシールドを破壊しなければならぬ。その為には高町なのは、フェイト・テストロッサの、そしてはやての力も」

「どうしてもはやてが必要になるんだよ!はやては足を怪我してるんだぞ!」

ヴィータが叫ぶ

「理由は話す。あと叫ぶなはやてが起きる。」

「くっ……」

「まず闇の書を覚醒させたら闇の書ははやてを取り込むだろう。そしてはやてを管理人格にあわせる」

あとは、はやて次第だそれしか方法はない」

「けどそれが嘘だったら……」

ヴィータが疑うそしてシグナムが

「ヴィータ……あやつ目は嘘をついていない……ここは信じよう。」

「分かった……けどもし変な行動してみろ！その時は私がぶっ潰す！」

「いいだろう。」

「そして蓄積についてだが俺、シグナム、ヴィータ、ザフィーラのメンバーで無人世界の生物から蓄積する。効率が悪いかもしいが襲うわけには行かない……だが奴らは邪魔をするだろう」

その時は相手をするのみ。管理局への交渉は俺がやる……いいな？」

「……分かった（りました）」「」「」

無人世界へ蓄積の旅（前編）

「最初はシグナムとザフィーラで文化レベル0の世界へ行ってくれ」
俺は守護騎士達に指示をだしている

「ヴィータは闇の書をもって別の世界で蓄積活動を行ってくれ」

「分かった」

「では行くぞアルフィ転移を頼む」

『了解』

（アルフィとりあえずシグナムとフェイトを戦わせるのは原作どおりで進める。リーゼ姉妹のどちらか フェイトのリンカーコアを引き出すだろう・・・そこを狙う）

（了解しました。魔眼のほうは？）

（準備だけしといてくれ）

（了解）

シグナムside

「はあはあ・・・さすがに長期戦だと不利だな・・・」

その時、シグナムの背後から魔法生物が攻撃をしかけてきた

「なっ!？」

シグナムは魔法生物の触手?みたいなものでしぼられてしまった

「くっ・・・しまった・・・くっ・・・うあああ!!」

シグナムに攻撃がせまった瞬間、何処からか攻撃がきた・・・それはフェイトだった

「ブレイク!」

魔法生物終了のお知らせ

「礼はいわんぞ・・・テストロッサ」

「お邪魔でしたか？」

「収集対象が潰されてしまった。」

そついいながらレヴァンティンにカートリッジをいれるシグナム

「まあ・・・悪い人の邪魔をするのが私の仕事ですし」

「そつだな・・・悪人だったな私は」

ヴィータ side

ヴィータはシャマルと念話をしていた

(シグナム達が?)

(うん。砂漠で交戦してるの・・・テストロッサちゃんと)

(長引くと不味いな・・・助けにいくか・・・!?)

(ヴィータちゃん?)

(くそつ・・・こつちにもきた。例の白服)

「高町なんとか!?!」

そう・・・ヴィータの一言でシリアスな空気がぶち壊れた

「ふえっ！？なのはだつてばあ！な・の・は！」

「ヴィータちゃん・・・やっぱりお話聞かせて貰う訳にはいかない？もしかしたらだけど手伝える事が あるかもしれないよ？」

「管理局の言う事なんざ信用できるか！」

「私、管理局の人じゃないもの・・・民間協力者」

（闇の書の収集は魔道士一人につき一回・・・こいつを倒してもペー
ージにはなんねえんだよな・・・
カートリッジの無駄使いも避けたい・・・）

「ヴィータちゃん・・・」

「ぶっ倒すのは・・・また今度だ！」

ヴィータが叫んだ瞬間足元に赤い魔方陣があらわれた

「ふえ！？」

「吼える！グラーファイゼン！」

その瞬間、大きな衝撃波が生まれた
その間にヴィータは距離をとった

「ここまで離せば攻撃もこねえ・・・次元転送！・・・！！？」

『デイベインバスター ドライブイグニッション』

「行くよ！久しぶりの長距離砲撃」

『ロードカートリッジ』

「まさか・・・打つのか！？あんな遠くから」

「デイベイイイイン・・・バスターアアアア！！！！」

「嘘！？」

直撃したと思われたその時・・・仮面の男が防いだ

「あっ・・・あなたは・・・」

「行け・・・闇の書を完成させるのだから？」

「くっ・・・」

そしてヴィータは次元転移をした

無人世界へ蓄積の旅（後編）

シグナム side

「はあ・・・はあ・・・」

シグナムの左腕から血が流れている

（ここにきて・・・尚速い、眼で追えない攻撃が出てきた。早めに決めないと不味いな）

「ハア・・・ハア・・・強い・・・」

フェイトは左足から血を出している

（クロスレンジもミドルレンジも圧倒されっぱなしだ。今はスピードで誤魔化してるだけ

まともに食らったら・・・叩き落される！）

互いは再び自分のデバイスを構えなおした

（シュツルムファルケン・・・当てられるか・・・）

（ソニックフォーム・・・やるしかないかな）

互いが踏み込んだその時・・・フェイトの体を腕が貫いた

「なっ!?!」

シグナムも驚いている

そしてその腕は・・・仮面の男の腕

「テストロツサ・・・」

「うっ・・・うわああああああ!!!!」

「貴様・・・!?!」

その仮面の男はフェイトの体からリンカーコアを取り出した

「さあ・・・奪え・・・」

「させると思うか?」

「」「なっ!?!」「」

シグナム、フェイト、仮面の男は驚いた

「求めるは水雲>>>・崩雨^{みすみ}！」

その瞬間、翔が発動した魔方陣から圧縮された水の激流が仮面の男を襲った

「なに！？。・・・グアア！」

そして翔はフェイトを抱えた

「あなたは・・・エミヤ・・・」

そう、翔はローブをしているのでフェイト達は正体を知らない・・・

仮面の男は立ち上がった・・・

「邪魔するな！」

仮面の男はものすごい勢いで殴りかかってきた・・・だがそのスピードは翔には劣る

「勢いはいい・・・だが・・・我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す！」

この魔法は自身の身体能力を強化するものである

「遅いな・・・」

「なに！？。・・・ぐああああ！！！！！！！！！！」

翔は仮面の男の背後をとり蹴り飛ばした・・・もの凄い勢いで・・・

『マスター、やりすぎです』

「仕方ないだろ・・・加減わからないし」

仮面の男は隙を見て多重転移した。

「俺達も帰るぞ・・・」

「分かった・・・テストロッサ！今回は邪魔が入ったが次こそは決着をつけるぞ」

「はい・・・」

そして守護騎士達は八神家へ戻り俺は家へ帰った

そして翌朝、シグナム達から連絡があった。はやてが倒れた・・・と俺は急いで病院へ向かった

「はやて！大丈夫か？」

「あっ翔くん」

「倒れたって聞いたぞ・・・」

「大丈夫や・・・めまえがして、胸と手がつっただけや」

「そうか・・・よかった・・・」

「ありがとうな、来てくれて」

「いや・・・大丈夫だ。問題ない」

(一番いいのを頼む)キリッ

(だからお前は黙れwww)

地味に突っ込んでくるアルフィであった

フラグを避けるのは慎重に（前書き）

二日ぶりの投稿です。

翔「なにがあつた？」

作者「いやあねえ・・・友達とカラオケ行ったりしてました」

翔「小説の人気は相変わらずだが、作者も相変わらずだな・・・」

作者「畜生！反論できん！」

フラグを避けるのは慎重に

今朝、はやての見舞い行き、俺は少し遅刻して学校にいる

なのは達4人組が話しをしている。

そしてアリサが考え込んでる・・・

「じゃあ、放課後にみんなでお見舞いとか行く？」

「いいの!？」

「すずかの友達なんでしょ？紹介してくれるって話だったしさ。お見舞いもどうせなら賑やかなほうが いいんじゃない？」

ちなみに俺は近くの席で話を聞いているだけ。

誘われたら・・・一応、用事があると答え断るかな

「翔!」

「どうした？フェイト」

やはり来たか。

「実は今日、すずかの友達のはやてちゃんって子のお見舞いに行くんだけど・・・よかったら翔もどうかなって・・・」

「悪い、付き合っではやりたいんだが今日は用事があった・・・
すまない」

「うっん・・・大丈夫だよ、こっちも急だったし。」

とりあえず断った・・・今日の予定は、まずシグナムと無人世界へ蓄積をしに行かなければならない」

放課後、俺は人目が少ない裏路地で転移魔法を使った。

「シグナム！いるか？」

「星道か・・・」

「闇の書の残りページ数は？」

「・・・約60ページってことだな」

「60か・・・あと少しだな。近いうちにはやてに顔出しにしよう。」

「そうだな・・・主は寂しがつてはいないだろうか・・・」

「あいつには俺と同じクラスのすずかがいる・・・けれど、やはり俺らも少しは顔を出そう」

「そうだな・・・」

そして今日は12月24日・・・シグナム達となのは達が鉢合わせする時だな。

こればかりは回避しないほうがよさそうだな

「ごめんね、はやて。あまり会いにこれなくて。。。」

ヴィータが申し訳なさそうに誤っている。

「俺も悪いな、はやてあまり見舞いにこれなくて。」

「気にせんという。私は凄くうれしいよ」

その時ノックがなった・・・

「こんにちはー」

「「「「!?!?」「」「」

シグナム、ヴィータ、シャマルは驚いている・・・

「あれ？すすかちゃんや・・・はいどうぞー!!」

「「「「こんにちはー」「」「」

「今日はみなさんお揃いですか？」

（お前ら、警戒を解け・・・はやてにばれるぞ・・・）

（だが星道・・・）

（警戒しても始まらない・・・普通に振舞うぞ）

（分かった・・・）

「「!?!?」」

フェイトとなのはが驚いている・・・やはりな

「あれ？翔くん、はやてちゃんの事知ってるの？」

「ああ・・・友達だからな」

「ところでみんな今日は、どないしたん？」

「「セーの・・・サプライズプレゼント！」」

「今日はイブだからはやてちゃんにクリスマスプレゼント」

「ありがとうなあ！」

「あとであけて見てね」

なのはやフェイト達は今だに驚いている・・・さすがに無理もないか
そしてヴィータがなのはを睨んでる・・・すごい目つきだな

「なのはちゃん、フィトちゃんどないしたん？」

「えっと・・・少しご挨拶を・・・ですよね」

「はい・・・」

「みんなコート預かるわ。」

「「はい!」「」

問題はその後だな。そろそろ交渉の準備をしなければ・・・

(守護騎士全員、聞こえるか？俺はそろそろ管理局との交渉の準備
をする・・・すまない)

(なんで翔が誤るんだよ！あたしたちの為に頑張ってくれてるじゃ
んか！)

(そうだ、私は主が救われればそれでよい・・・)

(では、俺は一度家に戻る・・・)

「悪いな、みんな俺はそろそろ家に帰るな。みんなまた明日な」

「うん、翔くん今日はありがとうな」

「ああ・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4152z/>

魔法少女リリカルなのは 破壊と創造の転生者

2011年12月18日05時45分発行